

運動有能感を高めるための技能成果につながる教師のフィードバックの検討

—小学校のフットボール単元を対象にして—

有坂萌(群馬大学大学院)

1. 目的

小学校学習指導要領(2017)では、体育科の目標として「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」ことが明記されている。運動を習慣化するためには、「運動をすることが楽しいから参加する」(文部科学省, 2011)など、内発的な動機づけが重要であり、そのためには「運動有能感」が必要不可欠となる(岡沢ら, 1996)。そこで、本研究では運動有能感を高めるための技能成果につながる教師のフィードバックについて検討することを目的とした。

2. 方法

1) 期日と対象：2017年6月20日～7月14日にかけて群馬県S小学校6年A組(男子18名、女子12名)を対象に全9時間のフットボール単元を実施した。
2) 分析方法：(1)子どもの運動有能感の変容を検討するために「運動有能感測定尺度」を用いた(岡沢ほか, 1996)。(2)技能成果を測るために、学習カードから子どもによって立案された作戦をレベル別(レベルⅠ：既存のスペースを攻撃、レベルⅡ：スペースを創出して攻撃、レベルⅢ：状況判断で攻撃)に分類し、それがどの程度実行できたのか、毎時間実施したメインゲームから分析した(吉永ほか, 2004)。(3)教師のフィードバックは子どものどのような学習状況・言語内容であったのかを検討するため、深見・高橋(2003)を参考に状況関連的分析を行った。(4)教師のフィードバックを受けとめるのは子どもであることから、教師のフィードバックは子どもたちにどの程度受けとめられたのかを分析した。具体的には毎授業後に「教師の助言に対する子どもの受けとめかた(①助言の有無、②助言の内容、③助言の有効性)」についてアンケート調査を行った。

3. 結果考察

1) 運動有能感について：運動有能感の合計点をみると単元前は50.2点、単元後は54.0点であり、単元後に有意に向上した($p < .01$)。また因子ごと(身体的有能さ・統制感・受容感)にみると、いずれも有意に

向上した。

2) 技能成果について：学習段階が進むにつれて作戦の立案および実行いずれもレベルⅠよりレベルⅡが多く出現し、成功率が向上した。これにより易しい作戦から難しい作戦を実行できるようになったといえる。

3) 教師のフィードバックについて：①最も多かったフィードバックは個々の子どもの学習状況を正しく認識し、それぞれの状況に応じて行われた「具体的」で「適切な」「矯正」的フィードバックであった。②この「矯正」的フィードバックを対象に、その後に技能成果(単元中)がみられた割合は79.8%であった。

4) 子どもの受けとめかたについて：①子どもが教師のフィードバックを受けとめた割合は単元平均78.3%であった。また、「役に立った」と回答したのは単元平均73.3%だった。②「子どもが受けとめた」と回答した教師によるフィードバックの内容と、実際に「教師が行ったフィードバックの内容」をみると、一致していたのが55.0%であった。このうち「矯正」的フィードバックを受けとめ、かつその後に技能発揮の機会があったものの技能成果ありの割合をみると30.6%であった。

4. まとめ

「子どもが受けとめた」と回答したフィードバックから単元中の技能成果ありの割合をみると30.6%であった。一方、「教師が行ったフィードバック」からその後の技能成果ありをみると79.8%であった。したがって、技能成果につながるフィードバックとは、子どもが「受けとめた」と回答したもの以外でも有効であることが明らかになった。技能成果につながるフィードバックの特徴として、学習状況に応じた適切で具体的な矯正」的フィードバックがあげられる。そして、技能成果が高まることによって「運動有能感」は向上する。

(参考文献)

深見英一郎・高橋健夫(2003)器械運動における有効な教師のフィードバックの検討。